

「戦争反対」訴え続ける

沖縄「慰靈の日」をよう78年

太平洋戦争末期の1945年、日本国内で最も犠牲を極めた地上

戦が行われ、20万人以上が犠牲になった沖縄戦から78年がたちました。沖縄県では23日、犠牲者を追悼する「慰靈の日」を迎えます。

(岡 素晴)

沖縄戦などで犠牲になった人の名前が軍人、民間人、出身地、国籍を問わず刻まれた糸満市摩文仁の「平和の碑」には、今年新たに365人の名前が追加。刻銘総数は24万2046人となりました。

沖縄戦をめぐって日本軍は、当

される一般の住民と、県出身の軍人・軍属を合わせて県民の4人に1人(12万2千人以上)が犠牲になりました。

日本軍の部隊がいた場所は米軍の攻撃対象にされたほか、日本軍が住民をスパイとみなし虐殺したり、住民を壕から追い出したりするなど、多くの悲劇が相次ぎました。「軍隊は住民を守らない」という教訓が語り継がれているのはそのためです。

那覇、中部からの避難民も相当數

だった住民が多数となり、首里や

摩田政権が沖縄の島々の軍事要塞化を進める中で迎える78年目の「慰靈の日」。地獄ながらの戦

初から「本土決戦」の時間稼ぎのための「捨て石」と位置づけ、持め、住民、日本軍、米軍が混在する戦場となり、住民の命が次々に失われました。推定9万4千人と

訴え続けています。▼関連③面

